

Title	心態詞の機能をもつin aller Welt、zum Teufelなど
Sub Title	Funktion der Wortverbindung in aller Welt in Ergänzungsfragen
Author	岩崎, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2006
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.23 (2006. 3) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	寄稿論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20060331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

心態詞の機能をもつ in aller Welt, zum Teufel など¹⁾

岩崎英二郎

英語にはドイツ語の心態詞に相当する語類 (Wortklasse) が、everなどは例外として、ほとんど存在しないということはよく知られているが、それだからといってドイツ語の心態詞に相当する表現が英語にはないというわけではもちろんない。その一つの例が補足疑問文に好んで用いられる the devil である。

(1) What *the devil* are you doing? いったい、なにをやってるんだ

この例文が掲載されている川本茂雄編『ニューワールド英和辞典』(講談社、1969)には、《疑問詞の強意として》という説明が添えられている。また『小学館ランダムハウス英和大辞典』(1973)で devil の見出し語を調べてみると、《強意語として》いったい全体；絶対…ない、という一項目を設けた上で、Where (How, When, Why) *the devil*...? いったいどこで (どのように、いつ、なぜ) …か、という例を挙げている。ここに見られる the devil の役割はまさに心態詞的な機能そのものであると考えていいだろ

1) 数年前のことだが、さるお方にドイツ語の心態詞についてのお話を申し上げる機会があった。そのとき Wo ist er denn? の denn についての私の御説明に対して、それは英語の on earth のようなものでしょうかとのお尋ねがあった。まことに恥ずかしい話だが、そのときまでの私には心態詞として扱われている一連の語のことばかりが念頭にあって、on earth や in aller Welt のような熟語のことはまったく考えていなかった。本稿はいわばそのときの御質問に対する感謝の気持ちを籠めての遅まきながらのお答えである。

う。devil (悪魔) に相当するフランス語は *diable* であるが、この *diable* もまたフランス語では補足疑問文で心態詞的に用いられている。ついでに言えば、英語と違ってフランス語には、例えば *déjà*, *donc*, *seulement* のように、明らかに心態詞として用いられる語が存在することは事実であるが、しかしドイツ語のようにまとまった語類としての心態詞はやはり存在しないのではないだろうか。ところで *diable* だが、『現代フランス語辞典』(白水社、1993) で *diable* を検索してみると、『疑問詞を強調して』一体、まったく、とあって、次の例文が掲げられている。

(2) *Que diable va-t-on faire?* 一体全体、どうすればいいんだろう

さらに『小学館プログレッシブ仏和辞典』(1993) を調べてみると、『疑問詞のあとで』一体全体、という一般的な訳語をつけたあと、次の二つの例文を挙げている。

(3) *Qui diable l'a cassé?* 一体だれがそれを壊したんだ

(4) *Pourquoi diable ne vient-il pas?* 一体なんだって彼は来ないんだ

英和辞典にせよ仏和辞典にせよ、まるで申し合わせたかのようにこれらの訳文に「いったい」「一体」「一体全体」などといった訳語が使われているのを見ると、一時代前の独和辞典を見る思いがしてほほえましい気もするが、それはともかく、ここに用いられている *the devil* や *diable* に心態詞的なはたらきが見られることは明白であろう。

英語の *devil*, フランス語の *diable* にこのような用法があるのであれば、ドイツ語の *Teufel* にも当然そのような使い方があるのではないかと考えたくなるのが自然だが、事実、ドイツ語の補足疑問文にも、*zum Teufel* の形でごくふつうに用いられている。この *zum Teufel* は、上に掲げた英語やフランス語の場合 (*what the devil*, *qui diable*) と同様に、疑問詞の直後に置かれることが多いが (*wann zum Teufel*, *was zum Teufel*, *wer zum Teufel*, *wo zum Teufel* 等々)、このことについてはあとでまた述べることにしたい。 *zum*

Teufel の例文についてはここでは『新アポロン独和辞典』（同学社、2000）（文例 5）と前田敬作監修『フロイデ独和辞典』（白水社、2003）（文例 6）を取り上げることにする。

(5) *Wer zum Teufel hat dich hergeschickt?*

いったいだれが君をここへよこしたのだ

(6) *Wer zum Teufel hat das gesagt <getan> ?*

そんなことを言ったくしたゝのは誰なんだ

従来は心態詞の研究というと、筆者をも含めて、とかく doch, ja, nur などのような心態詞の語類に属する語ばかりを好んで扱う傾向があったが、心態詞的な機能を担うものとしては、上述の zum Teufel をも含めて、実はほかにもいろいろあるのではないかという疑問がそもそも本稿を執筆する動機となっている。その一例としてここでは、これまた補足疑問文だけに用いられる in aller Welt を取り上げてみたいと思う。この in aller Welt もまた、前掲の zum Teufel と同様、原則として疑問詞の直後に置かれる (wann in aller Welt, was in aller Welt, wer in aller Welt, wo in aller Welt 等々)。なおここでぜひ断っておきたいのだが、前掲の the devil, diable, zum Teufel の辞書記述でさかんに用いられている《疑問詞の強意として》《疑問詞を強調して》《強意語として》等々の説明にはいささか首を傾げざるを得ない。これは in aller Welt の場合にも当てはまることだが、diable や zum Teufel は疑問詞を強調しているのではなく、その発話の主体である話し手の疑問、怒り、焦り等々の気持ちのその場での発露がたまたまこれらの言葉になったものだと考えたほうが分かりやすいと思う。日本語の「いったいあいつはどこにいるんだ」を考えてみれば分かるように、この「いったい」は「どこ」という疑問詞を強調しているのではなく、「彼」なる人物からいつまで待ってもなんの知らせも来ないことに対する話し手の焦燥感がこの「いったい」に籠められているだけの話である。

ところで本題の in aller Welt だが、これまたそれに対応する表現が英語にある。in the world と on earth である。

(7) Who *in the world* is he? あいついったいだれなんだい

(8) Where *on earth* have you been? きみはどこに行ってたんだ

われわれ外国人としてはとかく *in the world* (世界で) *on earth* (地上で) などの原義にこだわりたくなるが、われわれが「いったい」とか「一体全体」と言うときにその本来の意味をまったく意識していないのと同じことで、これらの表現もまた、本来の意味が次第に希薄になり、文法化 (*grammatikalisieren*) されて、いまやほとんど心態詞的な機能だけしか残っていないと考えるべきであろう。ついでに言えば、*the devil, diable, zum Teufel* の場合とは違って、*in aller Welt* や *in the world* に対応する表現、たとえばフランス語の *au monde* などにはこの種の用法はないとのことである。不思議と言えば不思議な話だが、平生から筆者の信頼しているフランス語学者の喜田浩平さんに伺った上でのことだから間違いはないはずである。

それではまず 18 世紀から現在までのドイツ語資料のなかで *in aller Welt* が補足疑問文に用いられている具体例をいくつかお目につけよう。

(9) Es wäre freilich gut, wenn es keine Selbstmorde gäbe. Aber man richte nicht voreilig. Wie *in aller Welt* wollte man z.B. in Trauerspielen die unnützen Personen wegschaffen? Sie durch andere ermorden zu lassen ist gefährlich. Alles ist weislich geordnet.

(Georg Christoph Lichtenberg, Sudelbuch)

この世の中から自殺なんてものがなくなったら、むろんいいに決まっている。しかし早急に結論を出さぬことだ。たとえば悲劇のなかから役立たずの人物を取り除くには他にどうすればいいというのだ。彼らをほかの連中によって殺させるというのも危険だし。世の中すべてうまくできているというわけさ。

(ゲーオルク・クリストフ・リヒテンベルク、雑記帳)

(10)

PRINZESSIN *ärgerlich*.

Aber was *in aller Welt*

Hat jetzt der Herzog dort zu tun? Wo aber,

Wo bleibt er denn? Was zögert er? [...]

(Friedrich Schiller, *Don Carlos*, Infant von Spanien, 2.Akt, 7.Auftritt)

公女 (腹立たし気に。) ほんにろくでもない公爵じゃ。

なんの用事でお出でなされたものやら。――

それにしても、今はどこにいらっしゃるのであろう。

どこにぐずぐずしておいでなさるのか。 [...]

(フリードリヒ・シラー、スペインの太子ドン・カルロス、第2幕、第7場、佐藤通次訳)

(11) An Zank und Streit war unter uns gar nicht zu denken; wir nannten einander *ma chère amie*, und waren sanft und lieb wie die Englein im Himmel, denn wir mußten immer französisch sprechen. Kein deutsches Wort durfte über unsre Zunge gleiten, außer im Fall der höchsten Noth. Wer *in aller Welt* kann in einer fremden Sprache, deren er nicht ganz mächtig ist, zanken und streiten?

(Johanna Schopenhauer, *Jugendleben und Wanderbilder*)

喧嘩や争いごとは私たちのあいだではおよそ考えられませんでした。お互いに親愛なる友と呼び合い、まるで天国の天使のようにおとなしく行儀よくしていたのです。フランス語しか話してはいけなかったからです。どうにもせっぱ詰まったとき以外には一言もドイツ語を話すことは許されませんでした。まだ完全には話せない外国語で喧嘩したり争ったりするなんて、できるわけありませんでしょう。

(ヨハンナ・ショーペンハウアー、青春時代と旅の風景)

(12)

Ein Fremder tritt herein.

FREMDER. Guten Morgen, Herr Wirt.

WIRT. Diener, Diener von Ihnen, gnädiger Herr. –

Wer *in aller Welt* sind Sie, daß Sie inkognito reisen und bei mir einkehren? Sie sind gewiß noch aus der alten Schule; gelt, so ein Mann vom alten Schlag, vielleicht aus dem Englischen übersetzt?

FREMDER. Ich bin weder gnädiger Herr, noch reise ich inkognito. – Kann ich diesen Tag und die Nacht hier logieren?

(Ludwig Tieck, Die verkehrte Welt, 2.Akt, 4.Szene)

見知らぬ男登場

見知らぬ男 おはよう、御亭主。

亭主 ようこそ、ようこそお出でなさいました、旦那さま。

いったいどなたさまで？ おしのびの御旅行で手前どものところへお越しとは？ きっとむかしふうの、格調高きお方さまにちがいない。もしかして英国直輸入とかでは？

見知らぬ男 旦那さまでもなければ、おしのびの旅でもないさ。ところで今夜ここに泊めてもらえるかな？

(ルートヴィヒ・ティーク、さかさまの世界、第2幕、第4場)

(13) [...] ‚Du gingst mit ihm, und es war dir nicht möglich, dem Mörder zu wehren? – ihn festzuhalten? um Hülfe zu rufen?‘ ‚Funfzehn, wohl zwanzig Schritte vor mir ging der Meister, ich folgte ihm.‘ ‚Warum *in aller Welt* so entfernt?‘ – ‚Der Meister wollt‘ es so.‘ [...]

(E.T.A.Hoffmann, Das Fräulein von Scuderi)

[...] 「おまえは親方といっしょに歩いていた。それで殺害者に抵抗することは不可能だったのか？ そいつに抱きつくとか、助けを呼ぶとか？」 「親方は十五歩 — ひよっとすると二十歩ほど先を歩いていました。わたしは後ろを歩いていました」「いったいまた、なぜそんなに離れて？」 「親方がそうしろと言ったのです」 [...]

(E.T.A.ホフマン、スキュデリー嬢、西義之訳)

(14) [...] Dicht vor dem Gitter saß ein Mann in einem schwarzen Mantel ohne Kopf an der Erde zusammgehockt, und unter dem Mantel hervor schnurrte die Musik. Gackeleia legte sich ganz dicht an die Erde, um zu sehen, wo nur *in aller Welt* die feine Musik herkomme, und wie war er erstaunt, als sie da unten ein Paar allerliebste Puppenbeinchen in himmelblauen, mit Silber gestickten Pantoffelchen ganz im Takte der Musik herumschnurren sah! Sie wußte gar nicht, was sie vor Neugierde, die Puppe ganz zu sehen, anfangen sollte. [...]

(Clemens Brentano, Das Märchen von Gockel und Hinkel)

[...] 四つ目垣のすぐ前にフードなしのコートを着た一人の男が地面にうずくまっており、そのコートの下からその楽の音が流れ出ていた。ガツケライアは、その美しい楽の音がいったいどこから聞こえてくるのかを知るために、地面にぴったりと身を伏せたが、そのコートの下で、空色に銀の刺繍を施したスリッパをはいたまことに愛くるしい人形の2本の足が、音楽の拍子に合わせてぐるぐる回っているのを見て、びっくり仰天した。人形の姿全体をぜひ見てみたいという好奇心のあまり、彼女にはなすすべもなかった。 [...]

(クレームンス・ブレンターノ、ゴツケルとヒンケルの童話)

in aller Welt はしばしば denn, nur 等々の他の心態詞と併用されるが、ここでは nur が in aller Welt の前に置かれて、wo nur in aller Welt... の形をとっている。

(15) [...] „Wir suchen irgend ein einsames Thal,“ sagte ich, „und schießen mit Pfeil und Bogen.“ – „Hm!“ sagte Goethe, „das mag kein schlechtes Vergnügen sein.“ – „Es ist herrlich,“ sagte ich, „um die Gebrechen des Winters los zu werden.“ – „Wie aber *in aller Welt*,“ sagte Goethe, „sind Sie hier in Weimar zu Pfeil und Bogen gekommen?“ [...]

(Johann Peter Eckermann, Gespräche mit Goethe, 1.5.1825)

[...] 「私たちはどこか^{ひとけ}人気のない谷間を探して」と私は言った。「弓矢の練習をするのです」「なるほど」とゲーテは言った。「悪くない楽しみかもしれないね」「すばらしい楽しみですよ」と私は言った。「それに冬のあい

だ体の不調を直す効果もありますから」「でもどうやって」とゲーテは言った。「きみはこのヴァイマルで弓と矢を手に入れたのかね」[...]
(ヨーハン・ペーター・エッカーマン、ゲーテとの対話、1825年5月1日)

ここでは *Wie aber in aller Welt...* となっていて、疑問詞 *wie* と *in aller Welt* のあいだに *aber* が割り込んでいるが、御承知のように接続詞 *aber* は融通無碍にどこにでも置かれ得るから、別に不思議なことではない。

(16) *Wie froh war ich nun, als ich mich vom ersten Schreck erholt hatte, daß ich mich hier oben in Sicherheit befand. Wie in aller Welt, dachte ich, kommt die nur jetzt hierher? wenn nun die liebe schöne gnädige Frau die Blumen abholt, – das wird eine schöne Geschichte werden! Ich hätte am Ende weinen mögen vor Ärger über den ganzen Spektakel.*

(Joseph Freiherr von Eichendorff, *Aus dem Leben eines Taugenichts*, 2. Kapitel)
最初の驚きがしずまると、ぼくは樹の上に無事でいたことをどんなに喜んだことだろう！いったい、どうしてこの女がここへやってきたのだろう？とぼくは考えた。あの愛らしい美しい令嬢が花をとりにきたのだったら——話はおもしろくなるだろうに！ぼくはこうした騒ぎ全体が癪にさわって、しまいには泣きだしたいようだった。

(ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ、*あるのらくら者の生涯より*、第2章、関泰祐訳)

(17) *Justine war erschrocken; dieser neue Verlust machte ihr aufrichtigen Ärger und Verdruß, und sie sagte daher etwas unwillig : „Aber was in aller Welt hat Sie denn gezwungen, in Handelsgeschäften zu wagen, da Sie ein Pfarramt und Einkommen besitzen?“*

„Ich habe Ihnen gesagt“, erwiderte der Pfarrer mit Traurigkeit, „daß ich meinen Stand nicht bloßstellen dürfe durch das Eingestehen meiner lasterhaften Torheit, und ich gehöre diesem Stand innerlich nicht einmal mehr an, ich habe ihn verlassen und darum reich werden wollen, um unabhängig leben zu können! [...]“

(Gottfried Keller, *Das verlorne Lachen*, 3.Kapitel)

ユステイーネはびっくりした。この新しい損失は、彼女をしんから怒らせ不愉快にした。それでいくらか不機嫌に言った。「ですけどいったい何があなたに、商売に手を出さねばならぬように仕向けたのですか、あなたは牧師様ですし、収入もおありになるのに？」

牧師は悲しげに言葉を返した。「私はあなたに、自分の罪深い愚行を白状して、自分の立場を危険に曝してはならないと申しましたね。ですが私は心のうちでは、自分もはやこの立場のものとは思っておりませんでした。私はこの立場を捨てました。だから独立して生きていけるようにお金持になろうと思ったのです。[...]」

(ゴットフリート・ケラー、失われた笑い、第3章、林昭訳)

(18) „[...] und er ist auf dem Wege hierher, und nun frage ich Sie, Herr von Lauen, was *in aller Welt* und um Jesu willen sollen wir mit ihm anfangen?“

„Das weiß ich nicht!“ sprach der Junker, sich hinter den Ohren kratzend. „Erst mußte ich doch wissen, wen *in aller Welt* und um Jesu willen du in Alexisbad oder in Mägdesprung gesehen hast. Wer ist in Glanz und Gloria auf dem Wege nach Krodeeck?“

„Das habe ich nicht gesagt?“ schrie Jane Warwolf immer erregter. „Nun, wer anders als mein anderer Gevatter?! Ihr Großvater, Herr von Lauen! [...]“

(Wilhelm Raabe, *Der Schüdderump*.19.Kapitel)

「[...] いまあの人はこちらへ向かっているんですよ。そこでお尋ねしますが、フォン・ラウエンさん、あの人が来られたら一体全体どうすればいいんでしょうか？」

「わたしにはわかりっこないだろう」とその貴族は耳のうしろを搔きながら言った。「その前にまず、一体全体だれにアレクシスバートとメグデシユプルングでおまえが出会ったのかを知らなければね。だれがご大層な身なりでこのクローデエックに向かっているのかを知らなければね」

「まだ申し上げていませんでしたっけ？」とヤーネ・ヴァールヴォルフはますます興奮して叫んだ。「私のもう一人の名付け親に決まっていますでしょう。あなたのおじいさまですよ、フォン・ラウエンさん。[...]」

(ヴィルヘルム・ラーベ、死体運搬車、第 19 章)

ここでは話し手の途方に暮れた、あるいはぜひ知りたいという強い気持ちの現れとして、*in aller Welt* だけではなく、*in aller Welt und um Jesu willen* という強調形が用いられていることに注目していただきたい。強いて比較すれば、日本語で「いったい」を強調するために「いったいぜんたい」の形が使われるようなものだとでも言えようか。

(19)

FRAU GABOR. [...] Ich lasse mein Kind nicht vor meinen Augen hinmorden. Dafür bin ich seine Mutter. – Es ist unfassbar! Es ist gar nicht zu glauben! Was schreibt er denn *in aller Welt!* Ist's denn nicht der eklatenteste Beweis für seine Harmlosigkeit, für seine Dummheit, für seine kindliche Unberührtheit, daß er so etwas schreiben kann! [...]

(Frank Wedekind, Frühlings Erwachen, 3.Akt, 3.Szene)

ガボール夫人 [...] 眼の前で自分の子供が殺されるのを黙って見ていることが出来ますものか！ それでこそ、私はあの子の母親ですもの —— ほんとうにわけのわからぬ、めちゃくちゃなお話ですわね。いったいなにを書いたというのでしょうか！ あんなものが書けるというのも、要するにあの子の無邪気さと、愚かさ、そして子供っぽい無垢の心を示すなによりも明白な証拠ではありませんか！ [...]

(フランク・ヴェーデキント、春の目ざめ、第 3 幕、第 3 場、川崎芳隆訳)

文例 (19) は *in aller Welt* が疑問詞の直後ではなく文末に置かれた珍しい例である。なお *in aller Welt* は *denn, nur* などのような他の心態詞と併用されることがしばしばあるが、ここでも *denn in aller Welt* の形が使われている。

(20)

DR. APPEL. Aber nachdem, was mir Ihre Frau Gemahlin sagte...
PROFESSOR GISELIUS *betroffen*. Was hat meine Frau gesagt?

心態詞の機能をもつ *in aller Welt*、zum Teufel など

DR. APPEL. Daß Sie von jeher für unsere Wissenschaft das wärmste Interesse hegen...

PROFESSOR GISELIUS *etwas ungeduldig*. Ach wo!

DER APPEL. Und sich viel damit beschäftigten?

PROFESSOR GISELIUS. Fällt mir doch gar nicht ein!

DR. APPEL. Ich glaube aber...

PROFESSOR GISELIUS. Wo *in aller Welt* hätte ich die Zeit dazu finden können!

Nein! Nein! Derartige Scherze dürfen Sie nicht ernst nehmen. Aber wir wollen auf unser eigentliches Thema zurückkehren...[...]

(Ludwig Thoma, Lottchens Geburtstag, 9.Szene)

アッペル博士 でも奥様から私が伺ったところによりますと...

ギゼーリウス博士 (驚いて) 家内が何を言ったのかね?

アッペル博士 先生は以前から私どもの学問分野にたいへん興味を抱いておられたとか...

ギゼーリウス博士 (いささかいらいらした様子で) とんでもない。

アッペル博士 そして多大の精力を傾注してこられたとか?

ギゼーリウス教授 思いもしなかったよ。

アッペル博士 しかしわたくしは...

ギゼーリウス博士 このわたしにそんなひまがどこにあるというんだね?

とんでもない。とんでもない。そんな冗談を真に受けてはいけないよ。

さて、このへんでわれわれ本来のテーマに戻るとして... [...]

(ルートヴィヒ・トーマ、ロットヒェンの誕生日、第9場)

(21) „Sie meinen, ich solle abreisen?“ fragte Hans Castorp... „Wo ich gerade erst angekommen bin? Aber nein, wie will ich denn urteilen nach dem ersten Tage!“

Zufällig blickte er ins Nebenzimmer bei diesen Worten und sah dort Frau Chauchat von vorn, ihre schmalen Augen und breiten Backenknochen. Woran, dachte er, woran und an wen *in aller Welt* erinnert sie mich nur. Aber sein müder Kopf wußte die Frage trotz einiger Anstrengung nicht zu beantworten.

(Thomas Mann, Der Zauberberg, 3.Kapitel, Satana macht ehrwürdige Vorschläge)

「つまり、僕に帰れとおっしゃるんですね？」とハンス・カストルプはき

いた。…「ここへきたばかりですのに？そんなこと！ 一日ただけでなにがわかるものですか！」

ハンス・カストルプはそういいながら、見るともなく隣のサロンをのぞいて、こちらをむいて坐っているショーシャ夫人の顔を、ほそい眼とひろい頬骨を見た。そして考えた。彼女はいったいなにを、だれを思いださせるのだろうと。しかし頭が疲れていて、すこし考えてみはしたが、思いだすことができなかった。

(トーマス・マン、魔の山、第3章、悪魔おしつけな進言をする、望月市恵訳)

文例(14)の場合とは異なり、ここでは *Woran und an wen in aller Welt erinnert sie mich nur?* となって、心態詞 *nur* が文末に置かれている。

(22) [...] Denn das ist mir klar, daß das die Fortgeworfenen sind, nicht nur Bettler; nein, es sind eigentlich keine Bettler, man muß Unterschiede machen. Es sind Abfälle, Schalen von Menschen, die das Schicksal ausgespien hat. Feucht vom Speichel des Schicksals kleben sie an einer Mauer, an einer Laterne, an einer Plakatsäule, oder sie rinnen langsam die Gasse herunter mit einer dunklen schmutzigen Spur hinter sich her. Was *in aller Welt* wollte diese Alte von mir, die, mit einer Nachttischschublade, in der einige Knöpfe und Nadeln herumrollten, aus irgendeinem Loch herausgekrochen war? Weshalb ging sie immer neben mir und beobachtete mich? Als ob sie versuchte, mich zu erkennen mit ihrer Triefaugen, die aussahen, als hätte ihr ein Kranker grünen Schleim in die blutigen Lider gespuckt.[...]

(Rainer Maria Rilke, Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge)

[...] 彼らがたんなる乞食ではなく、敗残者なのだということは、はっきりしていることだ。いや、彼らは、もともと乞食なんかではない。ぼくたちはその区別をしておかなければならない。彼らは^{くず}廢物、運命がペッと吐きだした人間の^{かす}外皮なのだ。運命の唾にぬれて、彼らは壁や、街灯や、広告塔にべったりと貼りつき、あるいはうしろに薄黒く穢れた痕跡を残して、ゆるゆると路地を流れていく。いったいこの老婆は、ボタンや縫い針がい

心齋詞の機能をもつ in aller Welt、zum Teufel など

くつか転がっているサイドテーブルの抽出^{ひきだし}をかかえて、どこかの穴から這い込んできたこの老婆は、ぼくからなにを望んでいるのだろうか？ いつもぼくにつきまとして、じろじろとぼくをみているのは、なぜなのだろうか？ どこかの病人に緑いろの痰を、じぶんの充血した瞼に吐きかけられたようにみえる爛れ目で、その老婆はぼくを見破ろうとしているかのようだ。

[...]

(ライナー・マリーア・リルケ、マルテ・ラウリス・ブリッゲの手記、塚越敏訳)

(23) [...] Er ging eingeschüchtert, langsam und mit gesenktem Kopf zu Jonas in den ersten Stock und fragte ohne große Einleitung: „Was in aller Welt ist eine Hure?“

Jonas trank gerade eine Tasse Tee. Sein Gesicht war üppig mit grauen Haaren bewachsen. Er betrachtete Benjamin mit einem bekümmerten Lachen. „Nehmt ihr das in der Schule durch?“ Er schlürfte genießerisch den Tee. Das Täbchen verschwand fast in seinen großen Händen.

„Nein, aber Adolf hat Mama so genannt, weil ich keinen Vater habe.“

(Herbert Heckmann, Ein Wort wird entdeckt)

[...] 彼はしゅんとしてうなだれたまま、2階にいるヨナスのところへゆっくりと上がっていき、なんの前置きもなしに「売春婦っていったい何なの」と尋ねた。

ヨナスは紅茶を飲んでいるところだった。彼の顔は白髪まじりのもじゃもじゃの毛で覆われていた。彼は心配そうな笑みを浮かべてベンヤミンをじっと見た。「きみらは学校でそんなことを勉強しているのか」そう言いながらうまそうに紅茶をすすった。茶碗は彼の大きな手のなかに隠れてほとんど見えなかった。

「そうじゃないよ。でもアードルフのやつ、ぼくにパパがいないからって、ママのことをそう呼んだんだよ」

(ヘルベルト・ヘックマン、ある言葉の発見)

以上は 18 世紀から 20 世紀初頭にかけての文例であるが、21 世紀の現

在でもこの *in aller Welt* はごくふつうに使われている。試みに *was in aller Welt, wann in aller Welt, warum in aller Welt, wer in aller Welt, wo in aller Welt, wozu in aller Welt* 等々をインターネットで検索してみると、それぞれ何百もの具体例をたちどころに手に入れることができる。その一例としてベルリン市政府のホームページ (<http://www.berlin.de>) に寄せられた一市民の意見を御紹介しよう。このホームページには *Ihre Meinung ist uns wichtig! Sie wollen Anregungen geben, Kritik und Lob äußern? Oder wollen, wo immer auf der Welt Sie gerade sind, die Berlinerinnen und Berliner grüßen? Dann würden wir uns über einen Eintrag in das Gästebuch der Senatskanzlei freuen. Wenn Sie sich an den politischen Diskussionen der Stadt beteiligen und den Meinungs Austausch bereichern wollen, steht Ihnen unser Forum zur Verfügung: Hier werden Themen diskutiert, die Berlin bewegen.* という市当局からの市民への呼びかけがあるが、つぎの一文は 2005 年 5 月 25 日午前 5 時 21 分、Max Materne なる男性による書き込みである。

(24) Wann *in aller Welt* wird denn endlich mit der Umgestaltung des Berliner Alexanderplatz (*sic*) begonnen? Obwohl in allen Teilen der Stadt rege Baumaßnahmen vor sich gehen, scheint dieser (häßliche) Platz unberührt zu bleiben.

アレクサンダー広場の改修工事はいったいいつになったら始まるのか、もう待ちきれないぞ、という投稿者のいらいらした気持ちが *denn, endlich* と並んで *in aller Welt* にも籠められているようである。

これまでは主として *in aller Welt* が疑問詞の直後に置かれる例文を挙げてきたが、元来は必ずしもそうではなかった。初めは *in aller Welt* が文から独立して、挿入句的に、あるいは間投詞的に使われていて、それがこの用法の発端となったのではないだろうか。ハインリヒ・フォン・クライストの小説や戯曲にはそのような使い方が見られる (例文 25、26、27)。

(25) Nun galt es, beim Anbruch des nächsten Tages, die Frage: wer nur, *in aller Welt*, morgen um 11 Uhr sich zeigen würde; denn morgen war der gefürchtete

Dritte. Vater und Mutter, und auch der Bruder, der sich mit seiner Versöhnung eingefunden hatte, stimmten unbedingt, falls die Person nur von einiger Erträglichkeit sein würde, für Vermählung; alles, was nur immer möglich war, sollte geschehen, um die Lage der Marquise glücklich zu machen. Sollten die Verhältnisse derselben jedoch so beschaffen sein, daß sie selbst dann, wenn man ihnen durch Begünstigungen zu Hilfe käme, zu weit hinter den Verhältnissen der Marquise zurückblieben, so widersetzten sich die Eltern der Heirat; sie beschlossen, die Marquise nach wie vor bei sich zu behalten, und das Kind zu adoptieren. [...]

(Heinrich von Kleist, Die Marquise von O...)

さてこうして翌日が明けると、いよいよ問題は、そもそもいったい誰があした十一時に現れるであろうかということになった。あしたというのがその恐れられた三日であったのである。父と母は、そして和解に同調した兄も、もしその人物が多少ともがまんできるような人間であれば、絶対に結婚に賛成で、侯爵夫人の境遇をシェアせにするためなら、およそできるかぎりのことはなんでもしてやるといった。しかし万一その者の事情が、自分たちが特別の計らいで援助してやっても、侯爵夫人の事情にくらべてあまりにもかけ離れて悪い場合には、結婚には反対であると両親はいった。侯爵夫人はこれまで同様手許に置き、その子は自分たちの籍に入れると彼らは決心していた。 [...]

(ハインリヒ・フォン・クライスト、O侯爵夫人、国松孝二訳)

(26) [...] Nun denn, fragte Kohlhaas, warum also, *in aller Welt*, jagte man dich fort? – Herr, ich sag's Euch, versetzte der Knecht, weil man meiner los sein wollte. Weil sie die Pferde, solange ich dabei war, nicht zugrunde richten konnte. [...]

(Heinrich von Kleist, Michael Kohlhaas)

「では一体」とコールハースは尋ねた、「どういふわけでお前を逐い出したんだ。」——「旦那様、それは」と下僕は返答して、「私を遠ざけたかったからでございます。私が傍に居る間は馬を酷き使ふことが出来なかったからでございます。 [...]

(ハインリヒ・フォン・クライスト、ミヒアエル・コールハース、吉田次郎訳)

(27)

THUSNELDA *ernsthaft..*

Was denn, *in aller Welt*, was machen sie
In Rom, mit diesen Haaren, diesen Zähnen?

HERMANN.

Was du für Fragen tust, so wahr ich lebe!

THUSNELDA.

Nun ja! Wie nutzen sie, bei allen Nornen!
Auf welche Art gebrauchen sie die Dinge?
Sie können doch die fremden Locken nicht
An ihre eignen knüpfen, nicht die Zähne
Aus ihrem eignen Schädel wachsen machen?

(Heinrich von Kleist, Die Hermannsschlacht, 3.Akt, 3.Auftritt)

トウスネルダ (真顔になって)

いったい髪の毛や歯を手に入れて、

ローマの人たちは何に使うつもりなんでしょうね。

ヘルマン こりゃまた、本当に、何という質問をするのだ。

トウスネルダ そうじゃありませんか。いったい何に使うつもりなの。

そんなもの使うといたって、どうやって使うのかしら。

他人の髪を自分のに結わいつけるわけにもいかないし、

自分の頭蓋骨に歯を植えつけるわけにもいかないじゃないの。

(ハインリヒ・フォン・クライスト、ヘルマンの戦い、第3幕、第3場、佐藤恵三訳)

これらの場合は、今日ならば *wer in aller Welt, warum in aller Welt, was in aller Welt* とする方がむしろ自然であろう。文例 (14) の *wo nur in aller Welt*、文例 (15) の *wie aber in aller Welt*、文例 (19) の *was schreibt er denn in aller Welt* などの場合も、その語順は、*in aller Welt* が元来は挿入句

であったと考えれば、容易に説明がつくというものである。

次にこの in aller Welt と本稿の冒頭で短く触れた zum Teufel との違いについて一言述べておきたい。補足疑問文に用いられる心態詞には、怪訝の念、焦燥感、不信感、憤り等々、それぞれの場面に応じたさまざまな心理状態が反映していることは、bloß, denn, doch, nur 等々すべての心態詞に共通するが、それは in aller Welt と zum Teufel の場合にも言えることである。そして大ざっぱに言えば、zum Teufel のほうが、元来が「悪魔にさらわれてしまえ」「こんちくしょう」などという強烈な表現であるだけに、そのような話し手の気持ちを、とくに怒り、憤懣などマイナスの心理を、in aller Welt よりもさらにいっそう端的に、より直裁に表現していると言えるのではなかろうか。それともう一つ、zum Teufel は現在でも独立して間投詞として用いられることが多いだけに、wann zum Teufel, warum zum Teufel, was zum Teufel のように疑問詞の直後に置かれることが多いとはいえ、文中のその位置は、in aller Welt と比べると、やはりかなり自由であることを付け加えておきたい。

それではここで zum Teufel の使われている具体例をいくつかお目にかけよう。in aller Welt とのニュアンスの違いを味わいながら読んでみていただきたい。

(28) [...] Was *zum Teufel* hatte der unbeachtete und unscheinbare junge Mensch betrieben die lange Jugend hindurch, ohne sich aufzubrauchen? Das war die Frage, die alle Gemüter bewegte, und sie fanden durchaus keinen Schlüssel, das Rätsel zu lösen, [...]

(Gottfried Keller, Pankraz der Schmoller)

[...]いったいあのつまらぬ^{わかぞう}若僧は、長い青年時代を、くたばりもせずは何をしていたんだろう？これがみな^{みな}の心を衝いた疑問だったが、この謎をとく鍵は全然見つからなかった。 [...]

(ゴットフリート・ケラー、ふくれっ面のパンクラーツ、関泰祐訳)

(29) „Aber *zum Teufel*“ sagte jetzt der Alte, „was hattet Ihr denn nur für Schreibstoff? Ihr konntet doch nicht immer von Eurem Pack alter Zeitungen

zehren?“

„Nein! Ich hatte eben keinen Stoff als sozusagen das Schreiben selbst. [...]“

(Gottfried Keller, Die bißbrauchten Liebesbriefe)

「だが呆れたね！」と老人は言った。「いったいどんな材料があったんだい？　そうそういつでも古新聞の包を食ってばかりもいられなかったろうに。」

「ええ、いわば、書くことそのことの他には材料はなかったんです。[...]」

(ゴットフリート・ケラー、恋ぶみ濫用、関泰祐訳)

zum Teufel が単独で文頭に置かれているこの例文などは、was zum Teufel の zum Teufel が本来は間投詞であったことを示す好個の例とっていいだろう。同じような例をもう一つ挙げてみよう。

(30) Sagt der kleine Marquis: „Ihr seid sehr jung, Herr?“

Und der von Langenau, in Trauer halb und halb im Trotz: „Achtzehn.“ Dann schweigen sie.

Später fragt der Franzose: „Habt ihr auch eine Braut daheim, Herr Junker?“

„Ihr?“ gibt der von Langenau zurück.

„Sie ist blond wie Ihr.“

Und sie schweigen wieder, bis der Deutsche ruft: „Aber *zum Teufel*, warum sitzt Ihr denn dann im Sattel und reitet durch dieses giftige Land den türkischen Hunden entgegen?“

Der Marquis lächelt. „Um wiederzukehren.“

[...]

(Rainer Maria Rilke, Die Weise von Liebe und Tod des Cornet Christoph Rilke)

小柄の侯爵がいう。「きみは、まだとても若いんだね？」

ランゲナウうまれの兵士は、なかばかなしみのうちに、そして、なかば反抗するようにこたえる。「十八。」そして、かれらは沈黙する。

やがてフランス人がたずねる。「きみも故郷に、許婚者があるのかい、^く青年貴族？」

「きみは？」ランゲナウの兵士はき訊きかえす。

「あれは、きみのように^{フロンド}金髪だった。」

そして、ふたたび、かれらは沈黙する。やがてドイツ人がさげふ。「それなのに、なぜきみは兵士となって、この^{しやうれい}瘡癩の地を、トルコの犬どもにむかって、すすもうとするのだ？」

侯爵は微笑をうかべる。「ぼくは帰ろうとおもっている。」

[...]

(ライナー・マリア・リルケ、旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌、塩谷太郎訳)

(31) [...] sie hob das linke Bein, nahm den Rock übers Knie hoch, zog mit beiden Händen den schwarzen Strumpf an und schaute darauf. „Warum gucken Sie denn weg, zum Teufel!“ schalt sie: „Mancher von den Caballeros würde sich's tausend Francs kosten lassen, wenn ich ihm unter vier Augen meine Beine zeigte.“

(Joachim Maass, Schwierige Jugend, 3.Kapitel)

[...] 彼女は左の^{あし}脚を持ち上げ、スカートを^{ひざ}膝の上までたくし上げると、両手で黒の靴下をはき、じっとその脚を眺めた。「なんで目をそらせたりするのよ、まったく」と彼女はぼくを叱りつけた。「殿方たちのなかには、二人だけのときに私の脚を見せてくれたら千フラン出してもいいっていう人もいるくらいなのよ」

(ヨアヒム・マース、困難な青春、第3章)

おのれの美貌と肉体の魅力を武器に男たちを手玉に取ってきた女性の、あまりにも純真無垢でおくての（と少なくとも彼女には思われた）少年を前にしての自己嫌悪、その少年をいじらしく、またいとおしくとも思う気持ち、男ならもっと堂々と振る舞ってみたらどうと思ういらだちなど、相矛盾するさまざまな思いが、この zum Teufel に籠められているのではないだろうか。「疑問詞を強調して」などという単純なものではないことがよくお分かりいただけることと思う。

(32) „Wie kam es denn“, fragte Peter, „daß er so krank wurde?“

Sie zuckte die Achseln. „Es hätte nicht sein müssen“, sagte sie. „Aber er ist ja so eigensinnig. Er hat Schnupfen gehabt. ‚Bleib daheim bei dem Wetter‘, sagte ich. Aber er wollte durchaus einkaufen gehen. Und da ist er mit Fieber heimgekommen.“

Peter konnte sich nicht enthalten zu sagen: „Warum, *zum Teufel*, hast du ihn gehen lassen, wenn er erkältet war? Konntest du nicht auch einmal gehen?“

(Luise Rinser, Ein alter Mann stirbt)

「どういうわけで」とペーターは尋ねた。「あいつあんなにひどい病気になったのさ？」

彼女は肩をすくめた。「ああまでひどくならなくてもよかったのよ」と彼女は言った。「でもあの人って頑固だから。鼻風邪を引いてたのよ。こんな天気だから家にいたらって勧めたんだけど。どうしても買い物に行くって聞かないの。そんなわけで帰ってきたときには熱を出してて」

ペーターはもう黙っていられなかった。「風邪を引いてるってのに、なんで行かせちゃったんだよ？ たまにはきみが自分で行けばよかったのに」

(ルイーゼ・リンザー、老人の死)

(33) Sie waren sein Freund?

Sein Freund? Wessen Freund, *zum Teufel*?

Stefans Freund. Sie waren Stefans Freund?

Wer sagt das? Hat Stefan das Ihnen erzählt?

(Christoph Hein, Auf den Brücken friert es zuerst)

あなたはあの子の御友人だったのですか？

あの子の友人？ 誰の友人だっていうんです、いったい？

シュテファンのですよ。シュテファンの御友人だったのですか？

誰がそんなことを？ シュテファンがそう言ったのですか？

(クリストフ・ハイン、橋の上からまず寒くなる)

(34) Eine Weile schwiegen sie. Harry schloß die Augen, dann öffnete er sie wieder und musterte Helene, die immer noch auf ihrem Bett saß. Du frierst doch.

Geht so.

O Gott, Leni, schrie Harry, was *zum Teufel* ist los?

Ich weiß es nicht, sagte Helene leise.

(Doris Dörrie, Wandlungen)

しばらく二人は黙っていた。ハリーは目を閉じていたが、それからふたたび目を開けて、相変わらず自分のベッドに坐ったままにいるヘレーネをじっと見た。寒いだろう。

大丈夫よ。

まったく、レーニ、いったいどうしたっていうのさ。

自分でも分からないの、とヘレーネは小声で言った。

(ドーリス・デリエ、移り変わり)

(35) In diesem Augenblick meldet sich der kleine Florian, den alle nur Mädchen nennen: „Ich will euch nicht entmutigen“, sagt er. „Aber wo *zum Teufel* übernachten wir heute?“

„Wir werden schon was finden“, entgegnet Janosch.

(Benjamin Lebert, Crazy, 8.Kapitel)

この瞬間にみんなに女の子とだけ呼ばれているちびのフロリアンが口を挟む。「みんなの氣勢を殺ぐつもりはないけどさ」と彼は言う。「でも今夜はどこで泊まるっていうの？」

「なんとかなるさ」とヤノッシュュが答える。

(ベンヤミン・レーベルト、クレージー、第8章)

元来は間投詞的な表現であった in aller Welt や zum Teufel に上述のような心態詞的な機能があることを考えれば、その間投詞表現の代表格ともいべき Um Gottes willen! や Um Himmels willen!、あるいは verdammt noch mal や verflucht noch mal などもまた、間投詞としての本来の意味から出発しながらも、多少なりとも心態詞的な機能をも兼ね備えているのではなかろうと推測するほうがむしろ自然というものだろう。しかしこれについてはまだ調べ始めたばかりの段階であって、むろん早急に結論を出すわけにはいかない。それでは最後にその具体例を若干掲げて本稿を閉じることにする。その推測の可否については、どうか各自の語感でそれぞれに御判断

いただきたいと思う。

(36) „Wissen Sie, wer es war?“

„Nein! Sie erschrecken mich! *Um 's Himmels willen*, doch nicht Mignon? wer war's? sagen Sie mir's!“

„Ich weiß es selbst nicht.“

„Aber nicht Mignon?“

„Nein, gewiß nicht! Aber Mignon war im Begriff, sich zu Ihnen zu schleichen, und mußte aus einem Winkel mit Entsetzen sehen, daß eine Nebenbuhlerin ihr zuvorkam.“

(Goethe, Wilhelm Meisters Lehrjahre, 8.Buch, 7.Kapitel)

「相手がだれだったか、ご存じですか」

「いいえ！おどかさないでくださいよ。まさかミニヨンじゃないでしょうね。だれだったのですか。教えてください！」

「わたしも、知らないんです」

「では、ミニヨンではなかったのですね」

「ええ、たしかにミニヨンではありません。しかし、ミニヨンも、あなたのところに忍んでいこうとしていたんです。ところが、恋仇が先を越すのを片隅から見て、びっくりしたのです」

(ゲーテ、ヴィルヘルム・マイスターの修行時代、第8巻、第3章、前田敬作、今村孝訳)

(37) [...] Und so sprang er auf und bat Tebaldo leise, ihn ziehen zu lassen, er müsse in einer Herberge übernachten, den Grund wolle er ihm morgen sagen. – „Ich brauche ihn nicht zu hören“, antwortete Tebaldo sehr betrübt, „denn ich weiß ihn schon. Aber kommt nur morgen *um Gottes willen* wieder, sonst muß ich denken, ihr verachtet auch mich.“ – „So wahr der Herr lebt, ich komme morgen, und habe Euch sehr lieb!“ sagte Otto.

(Friedrich de la Motte Fouqué, der Zauberring, 1.Teil, 9.Kapitel)

[...] そこで彼は急いで立ち上がり、今夜は旅館に泊まらなければならないので、もう帰らせてくれ、その理由はあす言うからと、小声でテバルドに

頼んだ。「理由を伺う必要はありません」とテバルドは悲しげに言った。「私には分かっていますから。でもあしたはぜひ来てくださいいね。そうでないと私は、自分もあなたがたに軽蔑されているのだと考えざるを得なくなりますので」「あしたは何があってもかならずまいりますとも。私はあなたが大好きなのです」とオットーは言った。

(フリードリヒ・ド・ラ・モット・フケー、魔法の指輪、第1部、第9章)

(38) „Wollt Ihr etwa hinein?“

„Ja.“

„Um Gottes willen nicht! Sie würden über Euch herfallen.“

(Karl May, Der Schatz im Silbersee, 10.Kapitel)

「まさか中に入るつもりでは？」

「そうだよ」

「とんでもない。奴らに襲われますよ」

(カルル・マイ、^{シルバーゼー}銀湖の財宝、第10章)

(39) [...] Auf seiner Brust ist ein verschwommenes Kreuz aus gerollten schwarzen Haaren. Er legt sich mit ziehend langsamen Bewegungen neben sie und greift nach ihr.

Josepha fuhr empor und flüsterte, starr vor Scham und Entsetzen: „Was ist mit mir! Um Himmels willen, was ist mit mir!“ Sie schnellte wie eine Forelle vom Bett herunter und griff hastig nach dem Hemd. „Man sollte mich totschiagen dafür. Erschiagen!“

(Leonhard Frank, Deutsche Novelle)

[...] 彼の胸にはくるくる巻いた黒い毛が、もじゃもじゃと十字形に生えている。彼はそっと、からだをゆっくりと動かして、彼女のそばに横たわり、彼女にいどみかかる。

ヨゼーファは飛び起きて、恥ずかしさと驚きにこわばりながら、つぶやいた。「わたし、どうしたのかしら。とんでもないわ。わたしどうしたのかしら！」彼女は鱒のようにベッドから跳ねて落ち、慌ててシャツを掴んだ。

「こんなこと、叩き殺されても仕方がないわ。打ち殺される！」

(レオンハルト・フランク、ドイツ夜話、義則孝夫訳)

(40) [...] Und nun Schlangen vor jeder Zapfsäule. Die Ölkrise! Das schlug rein, sag ich Ihnen. War zwar ein Schock, aber kein heilsamer. Na klar, gehamstert haben sie. Alle vier. Und Gerhard, der sonst wie ein Gesundheitsapostel redet – „*Um Gotteswillen kein Fleisch! Nur ja keine tierischen Fette!*“ – und auf Grahambrot schwört, hat beim Umfüllen in Kanister, die er auch auf Vorrat gehamstert hatte, solange am Schlauch genuckelt, bis er knapp vor ner Benzinvergiftung gewesen ist, Brechreiz, Kopfschmerzen. Literweise hat er Milch getrunken. Und Heinz-Dieter hat sogar Badewanne aufgefüllt, daß es überall in der Wohnung gestunken hat und die kleine Sophie in Ohnmacht gefallen ist.

(Günter Grass, Mein Jahrhundert, 1973)

[...] それがいまはガソリンの給油塔の前は甍々長蛇の行列でしょ。オイルショックのせいで！これはこたえるパンチだったでしょうね。たしかにショックではあったけど、連中の車病にはなんの効き目もなかったようです。そりゃ当然よ、婿たちは買い溜めしてましたもの。四人ともね。そしてゲアハルトなんか、この婿は普段は健康を見守る守護天使のようなことを言ってるくせに——「とんでもない、肉は絶対いけない！動物性脂肪は摂っちゃいけない！」とかね——^{グラハム}全麦パンしか食わないほどの健康食マニアが、ガソリンを貯蔵用に集めてきた缶に移しかえるときには、ホースに口をつけて残りを吸い込んでいたので、遂にガソリン中毒にやられる寸前にまでなったんですよ。吐き気や頭痛に襲われて、ミルクを何リットルも飲みましたよ。それからハインツ＝ディーターって婿はバスタブにまでガソリンを溜めてしまったので、家中がガソリン臭くなり、ゾフィーって小さな女の子が気絶するって騒ぎだったんですよ。

(ギュンター・グラス、私の一世紀、一九七三年、岩淵達治訳)

(41) „Was war mit Ihnen *denn um Gottes willen* in Philadelphia los?“ fragte Neubert auf der Rückfahrt. „Was hat's da gegeben? New York hat gesagt, mit Ihnen sei nicht gut Kirschen essen. Sie sind doch ein ganz friedlicher

Zeitgenosse.“

Man habe ihm geraten, ihn beim geringsten Anlaß nach Hause zu schicken.

(Walter Kempowski, Letzte Grüße, 2.Teil, 17.Kapitel)

「フィラデルフィアであなたにいったい何があったんです？」とノイベルトが帰りの車中で尋ねた。「あそこでは何があったのですか？ ニューヨークでは、あなたとは付き合いきれないって言ってましたよ。あなたはふだんはまったく穏やかなお方なのに」

この男の言うには、ほんの些細なきっかけがあったら私をドイツへ送り返すように忠告されたとのことだった。

(ヴァルター・ケムポフスキー、最後の挨拶、第1部、第17章)

(42) Warum, um *Gottes willen*, halten Sie Wölfe?

Er zuckte mit den Achseln. Sie sind unzivilisiert, unberechenbar, das mag ich.

Haben Sie denn keine Angst?

Er sah sie kurz von der Seite an. Nö, aber Sie, was?

Juno antwortete nicht und spielte mit ihrem Rocksäum.

Keine Sorge, sagte er, nahm die rechte Hand vom Lenkrad – sie dachte, er wolle sie ihr auf den Schenkel legen, aber er kratzte sich nur den Bart. Solange sie mich als ihren Boss akzeptieren, sind sie zahm wie Lämmer.

Und wenn nicht?

Dann habe ich Pech gehabt.

(Doris Dörrie, Juno im Lalaland)

どうしてまたオオカミなんかを飼ってらっしゃるの？

彼は肩をすくめた。やつらは文明とは縁がないし、何をするか分からないし、そこが好きなんですよ。

怖くはないの？

彼は横からちょっと彼女の顔を見た。いいや、でもあなたは、怖いでしょ？

ユーノはそれには答えず、指でスカートのすそと戯れていた。

ご心配なく、と彼は言って、ハンドルから右手を離した —— その手を彼女の太腿の上に置くつもりだな、と彼女は考えたが、彼はただひげを搔

いただけだった。私を自分たちのボスとして受け入れているあいだは、まるで羊みたいにおとなしいんですよ。

もしも受け入れなくなったら？

そとのきは運が悪かっただけのことですよ。

(ドーリス、デリエ、ララランドのユーノ)

(43) Die Frau heiratet den Leoparden, und prompt bekommt sie schwarze Flecken auf der Haut, fuhr sie fort und umfuhr mit dem Finger ihren Tellerrand. Ich legte meine verunstaltete Hände neben meinen Teller, versuchte nicht wie sonst, sie zu verstecken. Emine betrachtete sie ruhig. Sie fragte mich nicht, was denn *um Gottes willen* mit meiner Haut los sei.

Vielleicht habe ich eine Tigerin geheiratet, sagte ich leise.

Vielleicht, antwortete sie und lächelte in sich heinein.

(Doris Dörrie, Sushi für Paul)

その女性がヒョウと結婚すると、彼女の肌にはたちまち黒い斑点ができるのよ、とエミネは話を続け、自分の前に置かれた皿のふちに沿って指をぐるりと回転させた。わたしはわたしのみにくい両手を自分の皿の横に置き、いつものようにそれを隠そうとはしなかった。彼女は平気でその手を観察していた。あなたのお肌いったいどうなさったの、などとは尋ねなかった。

もしかするとわたしはトラと結婚したのかも、とわたしは小声で言った。

そうかもしれないわね、と彼女は答え、ひっそりと笑みを浮かべた。

(ドーリス・デリエ、パウルに寿司を)

デリエの短編『ララランドのユーノ』と『パウルに寿司を』はともに1996年に出版された短編集『サムサラ』(Samsara)に収録されているが、文例(42)の *um Gottes willen* が前後をコンマで区切られてその独立性を強調しているのに対して、文例(42)のそれはコンマで区切られずに、いわば文のなかに溶け込んでいる。同じ作者であれば句読点の打ち方の違いにもそれなりの意味が籠められているにちがいないという筆者の勝手な想

像からすれば、前者に比べて後者のほうが、もしかすると心態詞としての性格の度合いが強いのもかもしれない。

(44) [...] „Es ist mir inzwischen egal, ob sich das verallgemeinern läßt“, sagte er, „ich jedenfalls bin nicht mehr bereit, diese Nebensachen, von denen du sprichst, im Namen irgendwelcher Hauptsachen zu unterdrücken, es sei denn, wir werden dazu gezwungen. Wenn ich mit jemand eine Sache anfasse, dann möchte ich *verdammt noch mal* wissen, ob ich den auch anfassen kann.“

(Peter Schneider, Lenz)

[...] 「いまのぼくにはもうどうでもいいのさ、一般化できるかどうかなんてことは」と彼は言った。「少なくともいまのぼくは、きみの言っているこれらの付随的なことを、なんらかの肝心な事柄の名において抑圧してしまつつもりはもうないんだ。絶対そうしろって命令されれば別の話だけどね。ぼくがだれかとある仕事を始める場合、そのだれかと仕事をやっていけるかってことも、ぼくはどうしたっても知っておきたいわけさ」

(ペーター・シュナイダー、レンツ)

どうしてぼくの気持ちを分かってくれないんだ、ぼくはどうあってもそれが知りたいのに、という「彼」なる人物（この小説の主人公であるレンツ）の切実な気持ちが *verdammt noch mal* からひしひしと伝わってくるように思えるのは筆者だけだろうか。

(45) Wann sonst, wenn nicht jetzt, sagte ich, wann denn sonst sollte etwas Grundsätzliches passieren? Das mußst du doch als einen Schnitt begreifen, als Chance, das mußst du *verflucht noch mal* kapieren, Mensch.

(Bernd Cailloux, Das Geschäftsjahr 1968/69, 21.Kapitel)

原則から変えようと思ったら、いま以外に、いまをおいてほかにないじゃないか、と私は言った。きみはこれを節目^{ふしめ}として、チャンスとして理解すべきなんだよ。分かってくれたら、まったく。

(ベールント・カイユー、営業年度 1968/69, 第 21 章)

文例 (45) の *verdammst noch mal* の場合と同様に、ちくしょう、なんで理解しようとしななんだ、という「私」のもどかしさと、相手になんとか理解してもらいたいという「私」の切なる願いとが、この *verflucht noch mal* にもまた読みとれるのではないだろうか。

(出典著者一覧表)

Brentano, Clemens (1778-1842)
Cailloux, Bernd (1945-)
Dörrie, Doris (1955-)
Eckermann, Johann Peter (1792-1854)
Eichendorff, Joseph Freiherr von (1788-1857)
Fouqué, Friedrich de la Motte (1777-1843)
Frank, Leonhard (1882-1961)
Goethe, Johann Wolfgang von (1749-1832)
Grass, Günter (1927-)
Heckmann, Herbert (1930-)
Hein, Christoph (1944-)
Hoffmann, Ernst Theodor Amadeus (1776-1822)
Keller, Gottfried (1819-90)
Kempowski, Walter (1929-)
Kleist, Heinrich von (1777-1811)
Lebert, Benjamin (1982-)
Lichtenberg, Georg Christoph (1742-99)
Maass, Joachim (1901-72)
Mann, Thomas (1875-1955)
May, Karl (1842-1912)
Raabe, Wilhelm (1831-1910)
Rilke, Rainer Maria (1875-1926)
Rinser, Luise (1911-2002)

Schiller, Friedrich von (1759-1805)

Schneider, Peter (1940-)

Schopenhauer, Johanna (1766-1838)

Thoma, Ludwig (1867-1921)

Tieck, Ludwig (1773-1821)

Wedekind, Frank (1864-1918)

(慶應義塾大学名誉教授)